

原発事故と甲状腺がん

がん社会 を診る

中川 恵一

プイリ原発から1600キロも離れたスイスでも、食品の放射能がかなり話題となっていた記憶があります。

なお、当時、スイスのすべての住宅には、地下に核シェルターと非常用の食料の備蓄が義務づけられていました。

当時の「仮想敵国」は旧ソ連でした。今は、核シェルターの義務化は解除されているようですが、スイスの全人口を超える收容スペースがあるといえます。

国民皆兵も、用心深いスイスという国の特徴の一つです。日曜になるとアパート近くの河原で、研究所の仲間が射撃演習を行っていて、びっくりしたものです。

さて、チェルノブイリ原発では、小児の甲状腺がんが増えました。これは、放射性ヨウ素(ヨウ素131)を含んだ雨が牧草地に降り、これを食べた牛の牛乳に大量の放射性ヨウ素が含まれたからです。旧ソ連政府は、チェルノブイリ事故を数日間、公表も

しませんでしたし、食品の規制も遅れました。ヨウ素は私たちの身体には不可欠な元素ですが、甲状腺ホルモンの材料としてだけ使われます。このホルモンは、新陳代謝を促進する作用があります。オタマジャクシがカエルに変態するときにも欠かせないホルモンです。

ヨウ素は主に海草から摂取しますから、内陸にあるチェルノブイリ周辺の子供たちは、慢性的なヨウ素不足でした。その子供たちの目の前に、原発から放出された放射性ヨウ素が突然出現したのです。放射性であろうとなかろうと物質としての性質は変わりませんから、子供たちの甲状腺に莫大な放射性ヨウ素が取り込まれてしまいました。

避難者が甲状腺に受けた放射線量は、平均490ミリシーベルトで、就学前の子供の5%で5000ミリシーベルト以上にもなりました。その結果、事故から5年以降、甲状腺がんが増え始め、患者数は7千名にも上りました。

1986年4月、旧ソビエト連邦で起きた史上最悪の原発事故で、ウクライナのほか、ベラルーシ、ロシアを中心に放射性物質が降下し、原発半径30キロ圏内が居住禁止区域となりました。

私がスイスに留学したのは事故からまだ3年しかたっていない199年でした。チェルノ



イラスト 中村 久美